

山中漆器

歴史

16世紀の後半にろくろ師が真砂[まなご]の村(現在の山中温泉上流)に移り住んだことが始まりとされている。後に、木地師たちは下流の山中温泉の地に定住するようになったが、当時は白木地のままの挽物で湯治客相手の土産物にすぎなかった。

江戸時代半ば(18世紀中頃)には、京都などから漆塗りの技法を学んで栗色塗が始まった。後に、朱溜塗と呼ばれ、山中漆器の特色となった。また、全国より塗師や蒔絵師を招き、髹漆[きゅうしつ]や蒔絵の技術を習得した。

江戸時代の末には、木地挽きの名手である蓑屋平兵衛が千筋挽などを考案し、明治の初期には、筑城良太郎が毛筋や稲穂筋などを創案して挽物の技が確立した。

特色

ろくろを使った挽物技術が特色である。木地の肌に極細の筋を入れる加飾挽きは、山中漆器が最も得意とするもので、その手法は千筋をはじめ糸目筋、ろくろ目筋、稲穂筋、平溝筋、柄筋、ピリ筋など数十種に及ぶ。この時使われる各種小刀やカンナはすべて木地師の自作であり、作業に応じて使い分けられる。

筋挽きによって加飾されたものは、摺漆[ふきうるし]という木地に漆をしみ込ませて仕上げる方法により、木目をきわだたせ使い込むほどに味わい深いものにする。また、挽目をあらわした挽物の上に渦のような赤、黄、黒の漆で塗り分けた独楽塗りの技法も特色の一つである。

木地は堅く、狂いのないケヤキやトチ、水目桜を使い、縦木取りと呼ばれる独特の方法で、立木を自然な方向に木取りするため、歪みが生じにくく、堅牢である。

また、豪華な高蒔絵を施した茶道具、持に、棗[なつめ]の制作には定評がある。

挽物技術が平成22年4月2日、石川県無形文化財に指定された。



HISTORY & FEATURES

The origin of Yamanaka lacquerware can be traced to the late 16th century. A woodturner who moved to Manago Village (present-day Yamanaka-onsen) brought woodturning techniques to the area. Some Manago villagers moved to Yamanaka to make their living by selling wooden products to hot-spring visitors. At first, these products were made of white wood with no lacquer. In the mid 18th century, famous master craftsmen were invited from all over Japan to introduce various techniques including *sensujibiki* (thousand-line engraving), *shudamenuri* (vermillion lacquer coated with transparent lacquer), and *komanuri* (concentric circles in different colors). With this shift from making mere souvenirs to creating artistic pieces, Yamanaka lacquerware became an authentic local industry. Woodturning skill is the most distinctive feature of Yamanaka lacquerware. *Fuki-urushi*, a lacquering technique that highlights the beauty of the wood grain, is also a feature of Yamanaka lacquerware.

情報 INFORMATION

主な生産地	加賀市(Kaga City)
主な製品名	飲食什器、茶道具(Tableware, tea ceremony utensils)
主な生産者	山中漆器連合協同組合(Yamanaka Lacquerware Cooperative Association) 〒922-0111 加賀市山中温泉塚谷町イ268-2 TEL (0761)78-0305 FAX (0761)78-5205 MAIL ylca@kaga-tv.com http://www.kaga-tv.com/yamanaka/